

函館で出会った人 工楽松右衛門

「函館が五月の連休のところで、小樽はまだまだそのあとだ。」
雄太が北海道を遠いところだと思っただのは、幼いころにおじさんから聞いたその一言がえいきょうしている。神戸では三月の末か四月の初めに満開になる桜の話だった。

雄太は六年生だ。三年ぶりに、今年一年生になった妹の和奏子とお母さんの三人で、お母さんの実家のある小樽で夏休みを過ごした。雄太たちは、神戸にもどる前に函館で一ぱくすることになった。お母さんの弟であるおじさんが函館に単身ふ任しているからだだった。三人は、おじさんのアパートにとまった。夜、おじさんが言った。

「雄太、函館は初めてだろ。明日少し見物していけよ。観光タクシーを呼んであげよう。お前、小樽や札幌しか知らんだろ。北海道には、もつともつといろんな所がある。ちようどいい。留守番しとる父さんにも、いいみやげ話になるぞ。」

翌朝、タクシーがおじさんのアパートまでむかえに来てくれた。
「ぼく、前に乗る。」

雄太は、運転手さんのとなりに座った。雄太は座席の前にはってある「乗務員証」で、運転手さんが「磯部一雄」という名前だと知った。「雄」の一文字が自分と同じだと思うと親近感がわいた。「この人を磯部さんと呼ぼう」と思った。その磯部さんが聞いてきた。

「どちらからですか。」

「神戸です！」

和奏子が、後部座席から大きな声で言った。雄太は、ふり向いて妹をにらんだ。

「神戸、兵庫ですね。私ら函館の人間は、兵庫に足を向けてねることができないんですよ。」
「えっ、なんで。」

雄太は磯部さんの横顔に、思わず聞き返した。

「いやあ、兵庫の人に対して本当に感謝しているということですよ。」

雄太は、春の遠足のことを思い出した。淡路島に行つて、函館のはん栄につくした人の資料館を見学したのだ。「その人のことにちがいない」と思った。しかし、名前が思い出せない。

「函館の港をつくつた人でしょ。淡路の人。」

と、雄太は自信ありげに磯部さんに言った。

「ははあ、高田屋嘉兵衛ですね。」

と、磯部さんは反応してくれた。

「そうや、高田屋嘉兵衛だ。」

雄太は名前を思い出し、いい気分になった。

「でもね、ぼく、それだけじゃ、半分なんだよ。」

「えっ、半分？」

雄太は少しあわてた。せつかくお母さんにいいところを見せたと思ったのに、半分だと言われ、後の気配をうかがった。お母さんは和奏子と町の景色を見ながら話に夢中になっていた。

「まず、函館山に登ってみましょう。そこからはその港がよく見える。きれいですよ。」
そう言つて磯部さんはハンドルを切った。

名前を思い出せなかったのは不覚だったが、雄太は、さっきの「半分」の意味が知りたかった。

「磯部さん、半分つて、どういうことなん？」

雄太は思い切つて聞いてみた。磯部さんと呼ばれ、一しゅん、運転手さんはおどろいたようだったが、ちらりと「乗務員証」に目をやつて、笑顔で話してくれた。

「嘉兵衛さんは確かに函館の恩人ですよ。でもね、もうひと方、大恩人がいるんですよ。」

「兵庫の人？」

「そう、兵庫の高砂の人。」

雄太は、「高砂は神戸から姫路に向かうと中にあるな」と思った。

「高砂生まれの、工楽松右衛門つていう方ですよ。」

「クラク……？」

「もとは宮本さんという名前なんだけど、なんでもエトロフという島にふ頭を築いた功績で、江戸幕府からもらった姓だそうですよ。工楽の『工』は工夫とか工作とかの『工』だから、いろいろアイデアを楽しみながら物をつくるつていうような意味でしょうよ。」

「へえ、おもしろい名前やな。その工楽さんが函館で何かしたんですか？」

そう水を向けると、磯部さんは、

「ぼく、何年生？ 六年生か。えらいな、そういうことに興味をもつのは。中学生みたいだ。」
と、函館山の展望台に向かう坂道を運転しながら話してくれた。

「ぼくが言うように、函館というのって高田屋嘉兵衛さんなんです。函館にも資料館があるし、有名ですよ。でもね、函館の港を実際につくったのは松右衛門さんなんです。嘉兵衛さんより年上で、嘉兵衛さんと同じように船に乗って商売をしていた人なんです。とにかく物づくりが得意だった。言ってみれば、函館の港は嘉兵衛さんが目をつけ、松右衛門さんがつくったってことだね。港がなければ、この町は栄えなかった。だからね、この港をつくった松右衛門さんにも、私たちは、足を向けられないんですよ。」

雄太は、だんだん見えてきた函館の港を窓の外にながめながら磯部さんの話を聞いた。

「松右衛門さんはね、工事に必要な船や道具をその場で発明してしまう。松右衛門さんがかいた当時の道具や船の図面なんかを見てごらん。いやいや、江戸時代の人がこんな細かい図面をかいたのって、くらい精密だよ。細い筆にすみをつけてかいたんだね。じつに見事な図面だ。嘉兵衛さんは、そんな工楽さんの実力を見こんで函館の港づくりをお願いしたんでしょうね。そういう意味では、嘉兵衛さんもさすがなんですよ。」

「ふうん……。」

雄太はうなずいたが、磯部さんに言われた「半分」にこだわった。「工楽さんはたいした人かもしれないけれど、それは仕事でたのまれてやっただけじゃないか」と思った。「函館の恩人なんていうのは

大げさだ、やっぱり一番の恩人は嘉兵衛さんじゃないか」と、少々の反発を感じていた。車は山の中腹まで登ってきているようだった。

「ぼく、あら巻サケって知ってる？」

磯部さんが急に話題を変えた。うなづく雄太に、

「あれもね、松右衛門さんのアイデアなんだ。廻船問屋をやっていてサケに目をつけた。それで北前船で北海道から兵庫まで運ぶのに保存がよくなければというんで、発案してしまう。すごい人だね。」確かに工楽さんは何から何まで発明してしまうんだと雄太はちよっぴり感心した。

その様子が伝わったのか、磯部さんにはたりと笑って、こう言った。

「一番すごいのが、これなんだよ。松右衛門さんは船乗りになる修行をしていたから船のことはよく知っているし、廻船問屋として北前船に乗っていたから、船を操作するときの問題点がよくわかっている。何が必要で、何が大切かってことをね。工楽さんは帆に目をつけた。当時の船は、もちろんみんな帆を立てて進むんだけど、どうもその帆の素材が悪い。これは改良をしなければいかんって、ずいぶん研究した。それで、帆に使う布を発明したんだ。」

「えっ、帆に使う布？」

「そう。帆布といってね。これがまたすごい代物なんだ。それまで、帆はむしろや綿布を重ねたものだった。綿でつくるのは手間がかかって値段も高い。ところがぬれるとあやつりにくくなって、船の速度も落ちる。長い航海には向かない。そこで地元播州特産の木綿糸を使って厚くてじょうぶで安くで

きる帆布を發明した。これは雨にも風にも対応できて、何しろ長持ちするんだね。その帆布には『松右衛門帆』という名前がついたほどなんだ。」

「あら巻サケも船の帆も、すごいアイデアですね。きっと大金持ちになったんでしょ。」
反応を確かめるように、雄太は磯部さんの横顔を見て言った。まだ「半分」のことにこだわっていた。

磯部さんはちらりと雄太を見て、ゆっくり話し始めた。

「そう思うよね。でもね、松右衛門さんが本当にえらいのは、その帆布ですよ。發明とか技術っていうのは、今のご時世も著作権とか実用新案権とかいって権利を独りじめしてね、自分一人でもうけるもんじゃないですか。江戸時代もそうだった。秘伝とか何とかいって、だれにも作り方を教えないのが当たり前。ところがね、この松右衛門さんは、この帆は航海の安全に不可欠なものだと言って技術を独りじめしなかった。どうぞ、どなたでもご自由にお作りくださいと。」

「えっ！」

雄太はおどろいた。そして感心した。さっき「大金持ち」なんて言ったことを、少し反省した。

磯部さんは大きく息を吸って、そして、話し続けた。

「『世のため人のため』ってよく言うよね。でも、だれだって自分や身内が第一で、知らない人のことなんかおかまひなしってというのが世の中だ。江戸時代だって、そうだったでしょうよ。ところが、松右衛門さんはちがうんだ。これで便利に安全に航海ができればそれでよし。そこがえらい。函館の港づくりにしたって、仕事だったろうけど、自分を支えてくれた北海道への恩返しだったと思うんで

すよ。だからね、嘉兵衛さんとか、松右衛門さんみたいなふところなのでかくて深い人とかかわりをもてたってことが、函館のほこりなんだよ……。さ、着きましたよ。港がよく見えますよ。」

和奏子が、はしやぎながら車を降り、お母さんと雄太に手招きをした。

雄太も眼下に広がる、大きく入り組んだ函館の港を見た。

今から二百年以上も昔、ここをつくっていた工楽松右衛門さんのことを考えた。

「世のため、人のため、か……。」

磯部さんが言ったその言葉を、雄太はつぶやいてみた。

神戸で待ってるお父さんにこのことを話そうと思った。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。